序

先頃，建築学会がコンクリート関係の技術講習会を各国各地で行なった．そのあとで，講師の一人が述懐したことがある．「講演のあとで聴講者の中でもベテランと思われる人から，難しくて半分ぐらいしか分らなかったといわれて愕然とした．われわれは正しい技術をできるだけ平易にして普及しようと努力しているのだが，現場との間に相当の隔りができているのではなかろうか．考えてみなければならない問題だ」

それを聞いた別の一人が話を継いだ．「コンクリート関係はまだ多少なりとも受け止めて貰える．左官の方になると誰も受け止め手がない．せいぜい出版社ぐらいだろう」

このようなギャップが，「学者のいうことは難しくて，実際の役に立たない」という現場側からの声となって現われる．しかし，明治の文明開化以来，建設方面の技術を押し進めてきた主力は学会であり，外に正しい技術があるとは思われない．

要は，その正しい技術が実際に有効に働くかどうかである．そして技術が社会で有効に働くかどうかは，技術の問題ではなく，社会の仕組みや文化の問題であるといわれる．

研究者は，近年の技術革新の波に乗り，自らをその旗手のごとく考え，ひたすら専門分野の研究に没頭してはきたが，しかし，その完成を以って責任の限界としてきた傾向がある．

一方，専門的技術知識は，専門家の側へ益々シフトする傾向がある．したがって大量の情報を抱えている専門家が，それを現実の場で十分に行使しなかったなら，社会的に働いている技術量は減少する．

このような問題への対応も，いまや研究者の仕事のひとつとなっているのではなかろうか．学会講習の反省会での声を，特に建設業内研究者へのひとつの示唆と考えたい．

1976年4月

清水建設株式会社研究所長

工学博士　烏　田　専　右